

## シノドスへの招き

### 第三回 道を歩む、ともに歩む

こんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。主日のミサをシノドス的な観点から読み、皆さんと分かち合いたいと思います。

#### ・シノドス＝ともに歩む

シノドスという言葉は、今は、世界代表司教会議と呼ばれていますが、もともと教会の中にあり続けた言葉です。教会の会議、集まりのことをシノドスと呼んでいました。使徒言行録の中にエルサレム教会会議というのがありますが、あれがまさにシノドスの原型になるわけです。

シノドスという言葉は、「シン」という接頭語と「ドス」という言葉からなっています。「シン」というのは、「ともに」という意味で、「ドス」というのは「道」という意味ですので、シノドスには「ともに歩む」という意味合いがあります。長い歴史の中で、教会はこのシノドスという教会の在り方を用いながら歩んできました。古代の教父ヨハネ・クリソストモスは、「教会とシノドスとはほぼ同義語である」と言っています。

つまり、そもそも教会というものは、選ばれた人の集まりではなく、ともに歩いていく人の集まりだということです。わたしたちは、教会と言うと三角形のヒエラルキア（位階制）を考えがちですが、これは役務の上でのヒエラルキアであって、それも一つの教会の本質を表していますが、一方で、老人でも、若者でも、子どもでも、赤ちゃんでも、身体の不自由な人でも、元気な人でも、どんな人でもそこに集える、そして、その人たちが一緒に歩いて行けるというのが教会の一つの姿だと思います。

#### ・第2バチカン公会議の実り

そして、そのような教会の特性、特質はシノドスという言葉で言い表されます。現在の世界代表司教会議は1965年に始まりましたが、ほぼ4年ごとに通常

総会が開かれており、今度の2023年が第6回の通常総会になります。それ以外にも2年置きぐらいに特別シノドスを行ったこともありますし、地域シノドスとして、それぞれの地域に関する会議を催したこともあります。ですから、1965年から振り返ると、この50年間でほぼ2年置きにバチカンを中心としたシノドス世界代表司教会議が行われていたということになります。

しかし、もともとシノドスというのは、「教会の集まり」を差す言葉なので、例えば、古い教会法典には「小教区のシノドス」という表現があります。今で言う信徒総会のような集まりもシノドスと呼べるわけです。あるいは教会の歴史の中では度々、何か問題が起こった時に、それを解決するために教会会議が開かれ、この教会会議もシノドスと呼ばれていました。20世紀に入ると教会の中で教皇の力が強くなり、それぞれの地域の教会単位で行うシノドスは、だんだん衰退し、忘れ去られていった部分があります。しかし、パウロ6世が1965年にシノドス世界代表司教会議を再開したのは、やはり「教会全体で取り組んでいきましょう」という思いからなのでしょう。ですから、シノドス世界代表司教会議は第2バチカン公会議の精神、実りなのです。今回のシノドス世界代表司教会議第16回通常総会もそのような流れの中で、第2バチカン公会議の実りとして、はっきりと教会の持つシノドス的な特性を明らかにしているのです。

シノドスとは非常に日本語にしにくい言葉です。「共に働く」と書いて共働、共働性と訳す場合もありますが、共働性ではないと思います。日本語に置き換えると言葉が先走しり、シノドスという言葉の持つ豊かな意味がそがれてしまうのではないかと思います。

#### ・ともに歩む

ここで、10月24日、年間第30主日B年の朗読箇所から、シノドス的な教会のイメージを味わいたいと思います。第1朗読はエレミアの預言(31.7-9)です。いわゆるバビロン捕囚からの帰還の預言ですが、特に8節、9節を味わってみたいと思います。

見よ、わたしは彼らを北の国から連れ戻し

地の果てから呼び集める。

その中には目の見えない人も、歩けない人も

身ごもっている女も、臨月の女も共にいる。

彼らは大いなる会衆となって帰って来る。

彼らは泣きながら帰って来る。

わたしは彼らを慰めながら導き

流れに沿って行かせる。

彼らはまっすぐな道を行き、つまづくことはない。

わたしはイスラエルの父となり、

エフライムはわたしの長子となる。

大草原や、砂漠の中をイスラエルの民が、若い人も、年寄りも、身体の不自由な人も、女性も男性も、皆一緒に歩きながら故郷に帰ってくるというイメージだと思います。これは、非常にシノドス的な姿を現しています。わたしたち日本人には、このような帰還、開放されて喜びを味わいながら歩くという体験が弱いかもしれません。皆と一緒に帰ってくるというと、わたしの世代くらいまでは、戦中、戦後の引き揚げの体験と結び付いて、何か悲惨な苦しい歩みということしか記憶として残らないのが残念です。涙を流しながら、泣きながら帰ってくる。そして、わたし（神）は彼ら（民）を慰めながら導くという体験は、わたしたちの民族、わたしたちの国には少し弱いのかなと思います。しかし、たくさんの人が皆で支え合いながら歩いていく姿がシノドス的なものと重なっていくのだと思います。

続いて、マルコ福音書（10.46-52）を味わいましょう。冒頭に「バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていた」とあります。また、同じ「道」という言葉が、福音の最後の部分「盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った」という箇所にも書かれています。マルコ福音書が非常に面白いのは、歩むイエス様を描いているところです。その歩むイエス様と共に歩いていく弟子たち、人々というイメージです。イエス様と弟子の一行がエリコの町に入った。そこに何日か滞在なさったのでしょう。その後、エリコの町を出て行く時に、バルティマイという盲人がその門の所で待ち構えています。彼は、いつもそこに座って物乞いをしていたとも考えられますし、イエ

ス様のことを聞いて会いたいと思い、「ここをイエス様の一行が通るからね」と誰かに言われ、誰かに連れて来られて待っていたのかもしれませんが。真実はわかりませんが、想像力をかき立てられる部分です。

『安心しなさい、立ちなさい、お呼びだ』と人々は盲人を呼びます。もしかすると、この呼んだ人々がバルティマイを連れてきたのかもしれませんが。「イエス様に会ってみたいけれど、わたしは目が見えないから会えないかもしれない。でも会ってみたい、会えば何かが始まるかもしれない、変わるかもしれない」と、バルティマイは普段から人々に言い続けていたのかもしれませんが。それで人々は、彼をエリコの門の出口の所に連れて行ったのでしょ。そこでイエス様との出会いの物語が起こります。道端で起こった小さな出会いの物語なのです。そして、イエス様に癒やされて目が見えるようになった時、この人は、道をなおも進んでいかれるイエス様に従っていくのです。

実は、このイエスが「なお道を進まれる」の「道」と、バルティマイが「道端に座って」いる「道」は、同じギリシャ語なのですが、今日のこの福音箇所の前に、3回にわたって同じように、その途中で、その途中で、その途中でと、道を歩む中での出来事が繰り返されています。やはりこれもシノドス的だなと思います。わたしたちの信仰は道のりであり、歩みです。この歩みの中でわたしたちは、いろいろなものを体験していきます。歩めない時や、苦しい時があっても、それでも一緒に歩んでいきましょうということなのだと、それが信仰なのだろうと思います。この「道をと共に歩む」ということが、シノドス的な姿になるのです。

#### ・これまでの歩み、これからの歩み

ですから、わたしたちがしなければならないのは、自分たちのこれまでの歩みを振り返ることなのだと思います。わたしたちは個人でも共同体でも、あるいは教区としても、日本の教会としても歩んできました。そこで本当に「とみに歩む」ことをしてきたのかを振り返ることが、そして今、わたしたちはどんな歩みをしているのか、誰と一緒に歩んでいるのかを考えることが必要だと思います。

わたしたちはどこに向かって歩いていくのかを黙想することが求められています。シノドスへの歩みというのは、何かイベントをすることよりも、むしろ、黙想することが大切になってくるのだと思います。教皇さまは度々、「今までのことを観想しなさい」と呼びかけています。自分に、自分たちに起こった出来事を振り返って、その歩みをよく味わってみる。そして今、自分がどこにいるかを味わう。そして、どこに向かって歩いていくのかを、希望を持って見続けていくことがシノドスの歩みの基盤になり、その上で初めて、様々な取り組みがあるのだと思います。次回も、福音、朗読の箇所からシノドス的な要素を取り出して皆さんと分かち合いたいと思います。